

反対の言葉のようで、実は表裏一体、シンクロシティを持った言葉同士なのだ。暴力よりも祝祭。喧嘩よりも祭り。スティールパンとカーニヴァルが、人種の垣根を越えたグローバルな文化として、それぞれの社会状況を反映しながら、世界各地に伝わっている。トリニダードからは余りに遠い日本への、文化の浄化された平和な伝わり方。それを否定するのではなく、楽しむことから、平和な社会が広がってゆくのかもしれない。(Web サイト R-Stone) ■

『アルゼンチンを知るための54章』（明石書店、2005年9月）著 アルベルト松本（スペイン語通訳&翻訳、通訳者育成講師）

出版までの経緯

2002年6月、日本では韓国と共同開催でサッカーワールドカップが行われたが、ちょうどその一年前に友人のアンジェロ・イシ（武蔵大学社会学部移民研究等の専任講師）が『ブラジルを知るための55章』を明石書店から出し、彼から1冊サイン付きの本を進呈され、私の生まれ育ったアルゼンチンの隣国でもある南米最大の国であるブラジルのことを読みその感想を彼にメールで送ったことを記憶している。W杯ではブラジルは大変盛り上がり優勝したのだが、彼の本もかなり売れたという。

それから数年後、あるきっかけで写真家でありアルゼンチンの日本人移民のパイオニアの一人であった賀集九平氏の孫にあたる賀集イレーネから元三井物産の社員で、現在ラテンアメリカとの文化交流事業を、主に中米のエルサルバドルとの間で手がけている平尾行隆氏を紹介され、そこから出版社にアルゼンチンに対する執筆の企画があると知った。その後、編集部の大江氏と会い、その時点でもう既に出版社も私のことをある程度調べていたため、すぐに話しもまとめ、企画の方針も定まったのである。



それからすぐにアルゼンチンについて下調べを行い、徹底したシステマチックな情報収集をしながら執筆の準備に入った。いつかアルゼンチンのことを書こうと思っていたため、既に持っていたデータベースを整理しこれを大いに活用した。また、インターネットを通じて現地の書店から最新の文献も購入した。

一般的な読者だけではなく、外語大等で南米関係の研究をしている学部生や大学院にも役立つような内容にするため、アルゼンチンをどのように紹介したら良いのか自分との葛藤が始まったが、下書きを行いながら一つ一つのテーマを淡々と書き始めた。

執筆作業

しかし、ある程度誰にでもアルゼンチンのことが理解できるような作品にするということはそう容易いことではないと、書き始めてからすぐに直面した課題である。日本では、それまでアルゼンチンというとタンゴやサッカー、ボル

ヘス（作家）やパンパ大草原、 gaucho やフォルクロレのことを等を部分的に紹介したものが多く、後は金融関係者や商社マンが実務的なニーズから収集した経済・政治情報ぐらいで、一般的にはプロトタイプでかなり偏ったイメージしか伝わっていないことに気づいたのである。大学の研究者に聞いても「アルゼンチンは中々理解できない国で、様々な要素を網羅した本はない」と言われ、ますますこの機会を「責務」と思うようになった。

政治や経済、社会や労働というのは比較的得意分野としてきたが、そうでない部分は一から調べることになり、参考文献もどんどん増えていった。生まれ育った国であっても知らないことはたくさんあるが、あまり考えたことがなかったことや知っているつもりでもいくつかの歴史的な事件については思い違いがあったことにも気づき、学生時代のように夢中になって「勉強」し、できるだけ内容を整理して書いていった。

それから、ブエノスアイレスのジェットロ事務所にいた知人や日系企業関係者の協力を得て日本人がアルゼンチンでビジネスを展開する際何を一番知りたがっているのか、何が一番理解できないのか、簡単なアンケートも行った。また、地元の日系社会の有識者にも日本とのコミュニケーションや交流で何が問題になっているのかについてヒヤリングを行った。ただ自分の自己満足のために書くのではなく、利用者や関係者に役立ってほしいということも常に念頭に置いた。

100年前アルゼンチンは世界有数の大国であった。そして戦後1960年代前半までは日本より経済規模も大きく一人当たりの所得も高かった。天然資源も豊富で、南米では識字率も高く、ヨーロッパの影響で文化水準もトップクラスであった。今もそうした要素は少なからず残っており、ブエノスアイレスの華やかさや文化事業

の多さは誰もが認めるが、ここ40数年の間経済と政治はあまりうまく機能してこなかった。このような状況になったことに多くの日本人、特に年配者は、今の日本の不安要素を反映してか、いろいろな疑問を投げかけてくれただけでなく、その理由を知りたいと迫ってきた。

私は様々な経済・社会現象について単純に国民性とかラテン的な無秩序要素とかという理由では片付けられないと思っていただけに中々納得のいく答えにはたどりつけなかったが、多くの識者や専門家の見解を分析した。結果的に、制度上の機能不備と制度的に修正を行うべき政治の怠慢と無責任な対応が長年において大きな障害となり、善良な市民であっても時と場合によっては法スレスレの選択または法を無視する他ならない、という社会をつくってしまったのではないかという結論に至った。政財界にいくら有能な人材が登用されていても、各政策の効果が末端にまでいくには制度的にその仕組みの中で一つ一つの役割を担っている人が機能し、法を遵守し、チェック機能が働かなければ不正や汚職は増える一方で、多くの努力が報われない社会を築いてしまうのである。

特にアルゼンチンの場合、世界が求めているほぼすべての資源が整っていないながら、それに領土が日本の7.5倍、人口がほぼ四分の一しかない。それにもかかわらず、誤った経済政策を繰り返して来たため、南米の憧れで多くの国の手本であったミドルクラスが大きな打撃を受け縮小してしまい、逆に貧困層が拡大し、そのうえ多くの優秀な人材が海外に流出してしまった。さらに、不安定な金融制度のもと2001年末には国としてデフォルト宣言をしてしまったのである。

一般の日本人はなかなか理解できないだけでなく、アルゼンチンに住んでいる一般市民も

当然ながらあのデフォルトには呆れ返った。口座からの引き出しは制限され、それまでの預金や資産は通貨切り下げで三分の一になり、債務だけが残ったのである。

様々な思いを描きながら、そして自分に対する答えも求めながら昨年6月頃にほぼすべての章を書き終え、結果的に54章になった。

出版後の反響と期待

刊行直後、関係者や執筆に協力してくれた方々に一冊ずつ進呈し、アルゼンチンにも20部ぐらい送った。そして二十数人から具体的なコメントや批評が届けられた。また、中南米関係の機関誌などでも紹介され、それなりに反響があったと思っている。教授や研究者、元社マンや文化交流関係者、タンゴの指導者、大学生、そして在アルゼンチンの日本人移民一世の方々からもコメントや指摘が届き、中にはわざわざ国際電話をしてきた者もいる。また、もう現役を退いている日系人コミュニティー旧新聞紙「亜囀日報」の元編集長からは生きた歴史証人として日系社会のことについては有意義なコメントをたくさんいただいた。そして、「ラプラタ報知」という地元日系新聞の現編集長高木氏は社説で祝福してくれただけではなく、私がアルゼンチン日系二世でありながら日本のことをも理解しながら自国を紹介したこと、そしてアルゼンチンの各出来事や現象を冷静に分析して分かりやすく書いたことを高く評価してくれたことはとてもうれしかったと言える。

また、数ヶ月前のことだが、ある番組制作会社がブエノスアイレスで取材を行うということでその事前準備とコーディネーションの仕事の打診で、担当プロデューサーはこの54章をほぼすべて読んでいて様子で関心のある部分にポストイットを貼って質問してきたのだ。こんな

に丁寧に読み仕事に活用してもらっているなんて著者としてこれ以上の喜びはないと思った。1年半の執筆作業だけではなく、両国のことを今まで真剣に勉強してきたことが報われた瞬間であった。今回の執筆は自分自身を試すという側面もあったが、自分の限られた日本語能力でいかにアルゼンチンという複雑でユニークな国をもっと理解してもらい、今後でも有意義で効果的な交流を促すことができるかという願いも込めた。今迄あまり紹介されてこなかったことをすることで逆に遠回りをせずフランクな友情が発展することを期待したい。 ■